

社会科における「思考・判断・表現」の評価のあり方

— 全国学力・学習状況調査(国語・算数)からみえる社会科学力 —

藤本 将人

北海道教育大学教育学部釧路校 講師

Ⅰ. 研究の背景と目的－評価観点の内実を明確化する必要性－

2008年の学習指導要領の改訂に対応して、2010年に指導要録の改訂が行われた。社会科の評価の観点は、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」と整理されている。従来の「思考・判断」「技能・表現」の観点が、「思考・判断・表現」「技能」と変更されたことにより、学校現場は「思考・判断・表現」の評価やそれらの力を育てる授業づくりへの対応が求められることとなった。

すでにこれらの力の学習指導と評価の研究が取り組まれてはいる⁽¹⁾が、実際の授業で教師が評価すべき「思考・判断・表現」の内実が明確化しにくいこと、また観点に対応した評価法のアイデアが提供されていないことにより、学校現場での研究や実践が困難をきたしている状況にある⁽²⁾。

本稿の目的は、思考・判断・表現を評価の対象としている国語・算数のペーパーテストの事実を分析することにより、社会科における思考・判断・表現とは何か、それをどのように評価すればよいのかという問いにアプローチすることにある。

考察の結果、学習指導要領・指導要録の改

訂は、学校現場に従来の学力観と評価法の転換を求めていることが明らかとなる。

学習場面においては、「知識の消費者」から「知識の生産者」へと目標を転換して授業を組むこと。評価場面においては、現実生活で出会うような社会問題を実際に解くことができるかどうかを見取れるよう作問すること。結論を先取りして示せば、このように表わすことができる。

以下、Ⅱでは分析対象とするテスト問題の設定理由について述べ、Ⅲで評価の事実を分析する。ⅣではⅢから得られた知見をもとに社会科における思考・判断・表現の評価のあり方について考察することとしたい。そしてⅤでは、社会科における思考・判断・表現の見取り方について提案を行うこととする。

Ⅱ. 分析対象と設定理由－思考・判断・表現を評価する国語・算数のテスト問題－

(1) 分析対象

本稿で分析対象とする評価実践は、以下のとおりである。

①平成22年度小学校国語「全国学力・学習状況調査」の「B問題(活用に関する問題)」の評価実践

②平成22年度小学校算数「全国学力・学習

状況調査」の「B問題(活用に関する問題)」
の評価実践

これらの評価実践を分析対象として取り上げる理由は二つある。ひとつは、これら二つの評価実践が国家レベルで実施されたものであり、評価問題づくりにおいては担当者に相当な説明責任が求められていることがある。説明責任の圧力は、評価の事実を精緻化する力として働いており、結果、評価問題の完成度も非常に高いものとなっている。

もうひとつは、これら二つの評価実践には、国家が意図した教育課程の成果が凝縮されていることがある。テスト問題には、見取ろうとする資質が明確に表現されており、学力の内実を抽出することが可能であると判断した。

全国学力・学習状況調査は、これまで国語と算数(数学)でのみ実施されている。社会科でも実施すべきとする意見が「全国的な学力調査の在り方等の検討に関する専門家会議」から提出されているが、未だ現実化はされていない。そこで、本稿においても国語と算数(数学)の問題を社会科に引き付けて分析を進め、評価観点の内実を明確化するという課題にアプローチすることとしたい。

(2) 全国学力・学習状況調査の目的

改訂された学習指導要領の総則には、「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視する (下線は筆者による)」⁽³⁾とある。

また平成二十二年度全国学力・学習状況調査解説資料には、「調査問題の作成に当たっては、学習指導要領に示されている内容が正しく理解されるよう留意するとともに、児童

生徒に身に付けさせたい力として重視されるものについての具体的なメッセージとなるように努め」たとある⁽⁴⁾。

要領において思考力、判断力、表現力の育成を重視すると記載し、解説資料には重視されているものについての具体的なメッセージとなるよう問題を作成したとある。このことから、全国学力・学習状況調査では、思考力・判断力・表現力を抽出することで子どもの学習状況を判断しようとしていることがわかる。本稿が問おうとしている思考・判断・表現の内実について理解するには、適切な分析対象であると判断できよう。

Ⅲ. 思考・判断・表現を抽出する方法

(1) 国語における「活用」テストの場合

思考・判断・表現を評価するには、問題上で実際に子どもたちに思考させたり、判断させたり、表現させなければならない。

図1は、小学校国語「B問題(活用に関する問題)」の設問3から抽出した思考・判断・表現の構造である。

解答者の思考は、「状況の設定の確認」「作問意図の分析」「問題の確認」の大きく三つの操作からなる。この三つの操作を行き来(思考)させ、その結果に基づき判断できるか、表現できるかを「問題への対応」で問うている。

解答者がたどる思考の順序は、以下のようにと推測できる。まず「状況の設定の確認」においてリード文を確認した後、「問題の確認」で出題されている問いを確認する。そして、状況と問題を往復し、「作問意図の分析」において、一段高い目線から全体を俯瞰して何が問われているのかを推測するというもの

である。具体的にみてみよう。

「状況の設定の確認」において、解答者は、問題文において誰が何をしようとしているのかを確認する。①「写真を使って発表する〈家の屋根の形〉」という問題が出題されていること、②丸山さんが自然とくらしについて調べた結果を発表するために発表原稿を書いていること、③発表時には写真の提示がなされること、④発表に対して、福島さんと大野さんが問いかけを行っていることを確認する。

次に、「問題の確認」において、どのようなことが問われているのかを確認する。

問1は、写真の提示箇所について問うている。伝えたいことと資料とを関係づけ、資料を効果的に提示するにはどうすればよいかについて、判断できるかどうかを試している問題である。具体的には、角度が急な屋根の家の写真と角度が緩やかな屋根の家の写真を発表原稿の中でどこに示したらよいかを選択肢から選ばせている。

問2は、発表時の問いかけの効果について問うている。話し手が聞き手に問いかけることによる効果や、聞き手が話し手に問いかけられることによる効果について表現できるかどうかを試している問題である。具体的には、発表者が聴衆に投げかけた言葉（「なぜ、このように角度が急になっているのだと思いますか」）について、聞き手がかけた言葉（「聞き手に問いかけたところがよかった」）の効果を表現させるものとなっている。

問3は、質問の種類について問うている。分からない点や確かめたい点などの観点を明確にして質問できるかどうかを試している問題である。発表について、資料を活用したことをよさとして評価した上で、写真の取材方

法と選択の理由や根拠について質問させている。具体的には、聴衆から出された質問が、「話し手が材料を集めたり整理したりしたときのくふうを聞き出そうとする質問」であると判断し、予め用意された選択肢の中から選ばせるものとなっている。

解答者は「状況の設定の確認」と「問題の確認」との操作を行き来しながら、解答に必要な学習事項を抽出、細分化し、両者と関連付けながら再構成する。この操作が「作問意図の分析」であり、「問題へ対応」、つまりは解答へとつながる思考となっていることが分かる。

(2) 算数における「活用」テストの場合

図2は、小学校算数「B問題（活用に関する問題）」の設問5から抽出した思考・判断・表現の構造である。

解答者の思考は国語の場合と同じく「状況の設定の確認」「作問意図の分析」「問題の確認」の大きく三つの操作からなり、この三つの操作を行き来（思考）させ、その結果に基づき判断できるか、表現できるかを「問題への対応」で問うている。

解答者がたどる思考の順序は、国語の場合と同じく、以下のように展開されると推測できる。

問1は、数量や図形についての知識・理解について問うている。「状況の設定の確認」において、解答者は、①ひろしさんが買い物に出かけたこと。②定価1000円の帽子には、「定価の30%引き」という札がついていること。③定価の30%引き後の値段を示す図が掲載されていることを確認する。

次に、「問題の確認」においては、定価と値引き後の値段を表している図について問われ

状況の設定の確認

〈写真を使って発表する〈家の屋根の形〉〉

丸山さんは、自然とくらしについて調べ、【写真①】と【写真②】を使って発表しました。

【写真①】 角度が急な屋根の家 【写真②】 角度が緩やかな屋根の家

発表原稿

ビルやマンションの屋根は、平らかになっているものが多いです。また、屋根全体が三角の形になっている家もあります。みなさんは、どんな形の屋根を見たことがありますか。

数名に答えてもらう

屋根には、いろいろな形があります。わたしは、各地の屋根の写真をたくさん集めて、日本地図に置いてみました。

すると、屋根には、その地方の自然に合わせた特色があることが分かりました。

調べたことの中から二種類の屋根について話します。

写真①の提示

この屋根の角度は、急になっています。雪の多い地方では、このような屋根の家が見られます。なぜ、このように角度が急になっているのだと思いますか。

しばらく時間をおく

それは、できるだけ、雪が屋根に積もらないようにするためです。雪は、たくさん積もると家をおしつぶすぐらいの重さになります。ですから、雪に備えるくふうの一つとして、屋根の角度を急にしています。さらに、積もった雪を熱で溶かして流すなど、いろいろなくふうがあります。

写真②の提示

これは、角度がゆるやかな屋根です。どうしてこんなにゆるやかなのだと思いますか。

聞き手の反応を見る

このような屋根が見られる地方は、台風の進路にあたることが多く、強い風から家を守る必要があります。屋根の角度が急であると、風をまともに受けてしまいます。だから、屋根の角度をゆるやかにして、台風の被害をできるだけ受けないようにしているのです。かわらは、飛ばないように固めています。

このように、家の屋根には、雪や台風などによるひがいに備えて、いろいろとくふうして作られているものがあります。

福島さんの意見：「なぜ、このように角度が急になっているのだと思いますか」について、「聞き手に問いかけたところがよかった」

大野さんの質問：「写真を使っていたので、説明がよくわかりました。たくさんの写真は、どのようにして集めたのですか。また、なぜ、その二枚を選んだのですか。」

思考

（「状況の設定の確認」「問題の確認」欄の記述は評価問題の事実から、「作問意図の分析」「問題への対応」欄の記述は、国立教育政策研究所教育課程研究センター発行の解説資料より筆者が引用し作成したものである。「思考」「判断」「表現」の記述は、筆者の分析結果を書き加えたものである。）

図1 小学校国語のテスト問題における思考・判断・表現の構造

作問意図の分析

発表原稿を書く
発表する

課題「自然とくらし」について調べる。

調べたことから発表する
内容を選択する。

伝えたいことと資料を関連付ける。
資料を効果的に提示する。

話し方を工夫する。

質問する

話し手の意図をとらえる。

分からない点や確かめたい点などの観点を明確にして質問する。

問題の確認

【発表原稿】を読んで、あとの問いに答えましょう。

問1 丸山さんは、発表をするときに、二枚の写真をそれぞれの場面で示せばよいか考えました。【発表原稿】のなかで「写真①を示す」「写真②を示す」が入るところを、それぞれ一か所選んで、その記号を書きましょう。

問2 丸山さんの発表を聞いた福島さんは、 部「なぜ、このように角度が急になっているのだと思いますか」について、「聞き手に問いかけたところがよかった」と言いました。なぜ、問いかけるといのかを説明しましょう。

問3 丸山さんの学級では、聞き手からの質問には、次の1から4までのような種類があるということを学習しました。そこで、大野さんは、あとの□のように質問しました。大野さんは、どの種類の質問をしていますか。最もふさわしいものを一つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 話し手が調べたことの中で最も伝えたかった内容を引き出そうとする質問
- 2 話し手が発表したことに対する自分の理解が正しいかを確認しようとする質問
- 3 話し手が材料を集めたり整理したりしたときのくふうを聞き出そうとする質問
- 4 話し手が調べたことと、自分が調べたこととを関係づけようとする質問

問題への対応

写真を示す箇所については、それぞれの写真の内容を端的に表している記述に着目することで明らかとなる。
したがって、写真①を示す箇所は「この屋根の角度は、急になっています。」の直前、写真②を示す箇所は「これは、角度がゆるやかな屋根です。」の直前と判断できる。

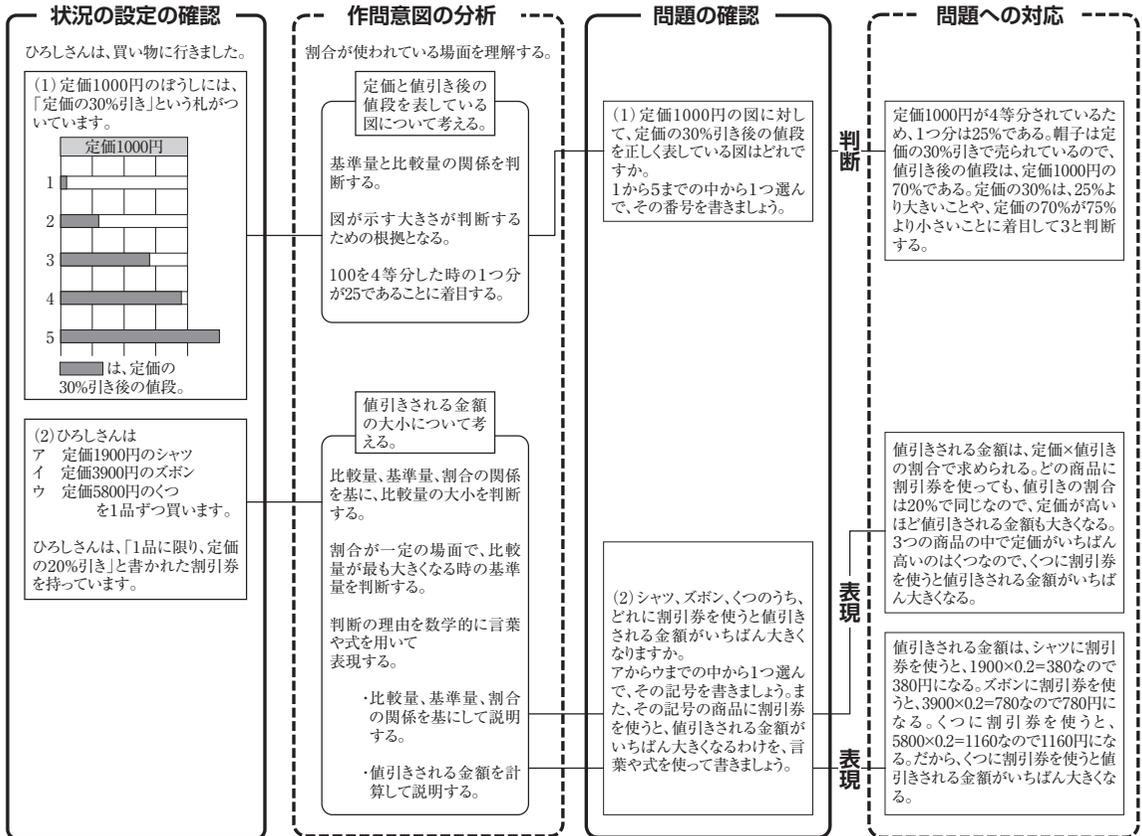
話し手が聞き手に問いかけることによる効果や、聞き手が話し手に問いかけられることによる効果について説明する必要がある。したがって、「聞き手が興味や関心をもって聞いてくれるから。」等と表現できる。

【大野さんの質問】では、丸山さんの発表について、資料を活用したことをよさとして評価した上で、写真の取材方法と選択の理由や根拠について質問していることをとらえる必要がある。したがって、「話し手が材料を集めたり整理したりしたときのくふうを聞き出そうとする質問」と判断できる。

判断

表現

判断



← 思考 →

図2 小学校算数のテスト問題における思考・判断・表現の構造

ていることを確認する。100を4等分した時の1つ分が25であることに着目し、基準量と比較量の関係を判断できるかどうかを試している問題である。具体的には、定価1000円の図に対して、定価の30%引き後の値段を正しく表している図はどれかを選ばせている。

問2は数学的な考え方について問うている。「状況の設定の確認」において、①ひろしさんが、定価1900円のシャツ、3900円のズボン、

5800円のくつを1品ずつ買う予定であること。
②「1品に限り、定価の20%引き」と書かれた割引券を持っていることを確認する。

そして、「問題の確認」において、値引きされる金額の大小について問われていることを確認する。割合が一定の場面で、比較量が最も大きくなる時の基準量を判断し、判断の理由を数学的に言葉や式を用いて表現できるかどうかを試している問題である。具体的には、

シャツ、ズボン、くつのうち、どれに割引券を使うと値引きされる金額が一番大きくなるか、またその理由を表現させるものとなっている。

解答者は「状況の設定の確認」と「問題の確認」との操作を行き来しながら、解答に必要な学習事項を抽出、細分化し、両者と関連付けながら再構成する。この操作が「作問意図の分析」であり、「問題へ対応」、つまりは解答へとつながる思考となることは、国語の問題と同じ構造である。

(3) 国語、算数のテストに共通する思考・判断・表現の内実

－実生活における問題解決の追思考－

国語と算数のテストにおける思考・判断・表現を構造化してみると、問題の作り方に三つの共通点を発見することができる。それは、「実生活における問題解決の追思考」とでも呼ぶことができるものである。

共通点のひとつは、子どもたちが実生活で体験するような場面を状況として設定していることである。国語では、授業での発表といった子どもたちにとっての日常を、また算数では、買い物場面における割引率の計算という身近な空間を設定している。

もうひとつは、設定した状況を分析するような問題を設定していることである。国語では、発表原稿を分解し、効果的なプレゼンの方法を判断させたり、話し手の意図を説明させたりしていた。算数では、割合が使われている場面を分析させている。これらはともに「作問意図の分析」を踏まえて「問題への対応」を行うようになっていた。

最後は、分析結果を根拠として、自分の見解を文章として記述させていることである。

国語・算数ともに図1・図2中の「表現」がそれにあたる。

この枠組みから明らかのように、全国学力・学習状況調査は、子どもが学校で学習してきた知識や技能を生活場面において活用できるかどうかを「思考」させているといえることができる。また、書かれている内容だけでなく形式を論理的に読み解き、問題作成者が何を意図して作問したのかを一段高い位置からメタ的に考察させ、適切な「判断」を選択・記述させていることがわかる。さらに、自らの「判断」を記述する際には、根拠となる事実を示して「表現」させるように作問されている。

日本で実施された全国学力・学習状況調査では、具体的な状況に応じて資料を目的的に読み込み、自分の見解を記述させることで子どもの「思考」「判断」「表現」を抽出しようとしているといえることができるだろう。

IV. 社会科における思考・判断・表現の評価のあり方

－「知識の消費者」としての資質を見取る評価から「知識の生産者」としての資質を見取る評価へ－

教育の質の改善は、全ての教科にとって積年の重要課題となっている。社会科も例外ではない。従来の社会科の評価実践は、教科書に記載されている知識群を「記憶(暗記)」し、テストに示されたヒント(どの知識群から正解を導けば良いのかを指定する語句)から該当の知識を確定させる“思考”で正解を導くものが多かった。“判断”や“表現”は、個人の主観を反映したものであり、ペーパーテストでは現実的に評価不可能と捉えられ、評

価対象として扱われてはこなかったのである。

評価観点の変更となり、その育成と評価への対応が求められているものの、実際の授業で教師が評価すべき思考・判断・表現は内実が不明確で曖昧なものであり、ここに、学校現場での研究や実践が困難をきたしている原因がある。

全国学力・学習状況調査の問題は、ある個別的知識群を記憶して、それをペーパーの上に再現するような力では解くことができないものとなっている。このような出題を可能としたのは、国語・算数のテスト問題の構造で示したように、思考・判断・表現の定義の更新である。従来型は、教師から与えられた知識を効率よく吸収し消費する学習であり、観点変更後は、自ら知識を創り出し生産する学習へと学習観の転換が起きている。

では、国語・算数から見出した思考・判断・表現の内実は、社会科の思考・判断・表現の評価にどのような示唆を与えるのであろうか。

社会科で問題を作成する場合、共通点の一つ目については、子どもが日常出会うような社会問題を状況として設定することが適当であると考えられる。二つ目については、社会事象に対する他人の判断を例示し、なぜそのような判断となったのかについて追思考させる問題を設定することが考えられる。三つ目については、自分の判断を根拠を示して論述させる問題が適当だろう。いずれにしても、具体的な状況に応じて資料を目的的に読み込み、自分の見解を記述させることが求められていると類推できる。

「知識の消費者」としての資質を見取る評価から「知識の生産者」としての資質を見取る評価への転換が求められているとまとめる

ことができるだろう。

V. 社会科における思考・判断・表現の見取り方

国語・算数のペーパーテストから類推した社会科の思考・判断・表現の評価のあり方は、三つの共通点を踏まえ作問することであると結論づけることができる。

社会科固有の思考とは何か、判断とは何か、表現とは何かについては、さらなる研究の蓄積を待つしかないが、現場での評価実践に困難を示している今日においては、ひとまず他教科から類推して社会科テストを作成することが望ましいであろう。評価実践の現実的改革としては、このような手法は有効である。

一方で、現実的改革は本質的変化をもたらしることができないととらえたとうえで、社会科評価のあり方を抜本的に変革するアイデアについても研究が進められている。それらは概してオーセンティック・アセスメントと呼ばれ、一連の研究が蓄積されつつある⁽⁵⁾。

社会認識の形成と市民的資質の育成という二つの教科目標をもつ社会科の評価については、さらに多層的に明らかにすることが求められている。

【註】

(1) 例えば、福岡県教育センターでは、校内研修での使用を想定した資料をホームページに公開している。資料には、観点の変更に対応した授業づくり、評価作りについての情報が掲載されている。

(http://www.educ.pref.fukuoka.jp/one_html3/pub/default.aspx?c_id=316, 2011年11月20日確認)

(2) 教師が抱えている実践上の課題については、拙稿「小学校社会科の評価技法」原田智仁編著『社

会科教育のフロンティア－生きぬく知恵を育む－』

保育出版社、2010年、pp.163-168.参照。

- (3) 文部科学省『小学校学習指導要領』東京書籍、2008年、p.16.
- (4) 国立教育政策研究所教育課程研究センター『平成二十二年度全国学力・学習状況調査解説資料 小学校国語』2010年4月、p.1.
- (5) 一連の研究成果については以下を参照願いたい。
 - ・拙稿「市民性教育におけるオーセンティック (Authentic) 概念の特質－ミシガン州社会科評価プロジェクトの場合」全国社会科教育学会『社会科研究』第61号、2004年、pp.21-30.
 - ・拙稿「小学校社会科の評価技法」原田智仁編著『社会科教育のフロンティア－生きぬく知恵を育む－』保育出版社、2010年、pp.163-168.
 - ・拙稿「社会科教育の評価」社会認識教育学会編『中学校社会科教育』学術図書出版社、2010年、pp.165-175.
 - ・田中耕治編著『パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい、2011年.